

題 目 不確実性下における資源分配の集団原理選択と分配的正義：ロールズ『正義論』
の実験的研究

氏 名 山西悠平

指導教官 竹澤正哲

本研究は、Rawls『正義論（1971）』における規範理論の実証的検討を通して、分配的正義の議論に実証的な観点から示唆を与えることを目的としたものである。

「限られた資源を社会の中でいかに分けるべきか」という問題は分配的正義の問題として歴史的にも長く議論されてきた（Aristotle,1985）。特に、社会的な動物（Dunbar,1998）であるヒトにとって「多様な価値観を持つ人々の間で、全員が納得して1つの分配ルールを選択するにはどうすべきか」という問題は重要であると言える。分配的正義論では、その間に答える重要な概念として不確実性という概念が注目されてきた。その代表的論者である Rawls は主著『正義論（1971）』で、一種の不確実状況である無知のヴェールに覆われた人々は全員一致でひとつの分配ルールに合意するであろうと主張した。無知のヴェールとは、自分の特殊利害に関する個別的事実を一切知らされず、一般的情報のみを持つという状態である。例えば、社会の中で自分が富める立場になるか貧しい立場になるかわからないという状態が考えられる。Rawls の主張のひとつは、その無知のヴェールに覆われた人々は、最不遇の立場の状態を改善するマキシミン・ルールに従うことが合理的であるというものであった。つまり、多様な価値観が存在していても、無知のヴェールという不確実性状況に覆われると、人々は全員一致でマキシミン・ルールという1つの分配ルールに従うという主張と言える。

これまでに Rawls の規範理論の実証的検討はいくつか行われてきた。ただし、無知のヴェールがなくても人々は最不遇の状態を自発的に考慮しているという報告はある一方で（荒井,2011）、無知のヴェールによる分配ルール選択行動への効果はこれまで見られなかった（Frohlich & Oppenheimer, 1993 ;川上,2009）。しかし、川上（2009）では、社会的相互作用が少ない個人による分配ルール選択に関する報告であり、Rawls が想定した集団選択状況や熟慮を行うことが含まれていなかった。

そこで本研究では、集団選択や議論などの社会的状況を組み込んだ川上（2009）の拡張実験を行った。本研究では川上（2009）と同様に「無知のヴェールに覆われている状況」を「意思決定における不確実状況」と再定義し、報酬分配の意思決定場面を実験室に設定した。不確実性の操作は、分配ルールを選択する際に実験報酬を決定する遂行課題（漢字テストなど）の内容が事前に知らされているかどうかで行われた。すなわち、自分が獲得できる報酬額が予測できない状況を無知のヴェールあり条件とした。また、分配ルールの選択は、議論を通じた集団選択、議論の前後における個人選択の計3回行われた。分配ル

ールは、均等に報酬を分配する「平等原理」と自分の成績をそのまま報酬とする「衡平原理」から選択された。本実験では、平等原理を「最も不遇な立場にある人の利益を最大にする」マキシミン・ルール（または格差原理）を含む分配ルールとして取り扱った。以上から2つの予測を検証した。(A)「無知のヴェールあり条件において、平等原理が選択される傾向にある」(B)「無知のヴェールあり条件において、議論後に平等原理の支持が増加する傾向にある」。

その結果、予測 A は支持されず、どの選択においても無知のヴェールあり条件で平等原理が選択されるとは限らなかった。また予測 B も支持されなかったが、実験条件によって議論前後の支持変化傾向に有意な差異が見られた。すなわち無知のヴェールあり条件では、なし条件ほど平等原理の支持が議論後に下がらないことが明らかになった。また、無知のヴェールあり条件では、集団が衡平原理を選択しても議論後に個人としては平等原理を支持する人の割合が比較的高いことが示された。加えて、社会的決定関式モデル (Davis,1973) の分析では、議論前に平等支持者が少ない集団において平等原理が集団選択される割合が、無知のヴェールあり条件では予測値と異なっていることが見られた。これらの結果から、議論という社会的な状況の中で平等原理を支持するにあたって、高い不確実性状況がその支持に対して有利に働いていることが言える。具体的には、実験条件によって議論内容に差異が生じていることから、無知のヴェールが議論の中で、異なる価値観の人々にも説得力を持つ支持理由を平等原理に提供している可能性が挙げられる。

本研究の結果の重要性は主に2つ挙げられる。まず、不確実性の共有が平等原理の社会的受容性を高める可能性を持つという結果は、分配的正義論における不確実性状況の設定という規範的思考の妥当性に実証的示唆を与えたことになる。また次に、これまでの先行研究においては分配原理選択に対する無知のヴェールの効果は見られなかったが、その効果は社会的な状況で見られることを指摘した点が考えられる。

「多様な価値観を持つ人々の間で、全員が納得して1つの分配ルールを選択するにはどうすべきか」という問題に対して、Rawls の主張は少し極端すぎたのかもしれない。つまり、無知のヴェールに覆われると、全員一致でマキシミン・ルールが選択されるとは言えないが、多くの状況で無視される傾向にある最不遇者や少数派の意見（マキシミン・ルール）が社会的に理解または受容されやすくなる可能性を本研究の結果は示している。